

ホップ・ステップ



26年「君たちはどう生きるか?」
新しい年がスタートしました。毎年、年の初めには今年はこうしようとか、こうしたいとか色々な事を思いますね。

**16歳未満のSNS禁止法
オーストラリアで施行 世界初**

る。一方で、全面的な禁止は現実的ではなく賢明な措置とは言えないとの批判もある。この画期的な政策は、アンソニー・アルバニー・ジーサ首相が特に力を注いできたプロジェクト。

皆さんにはこのオーストラリアの法律どう思
いますか？私個人としては賛成ですが日本で
は無理ですね。16歳未満の子どもたちがSN
Sを利用するメリットは全くないとは思いま



26期生で昨年教育大学卒業後、札幌で支援教員をやっている山上彩夏さんがその後の報告に来てくれました。大変だけど楽しいって！！

18期生で慶應大学から三菱重工に就職した新田智徳君が今年も顔を出してくれました。相変わらず忙しいそうで昨年は韓国へも。

17期生で歯科医の栗野秀哉君が2年ぶりに顔を見せました。今は歯周病認定医なので専門医を目指して勉強中だそうです。

7期生で北病院の作業療法士の佐々木卓也君が弔辞を読みなくてはならなくなつたと、その作成に塾に来ました。とりあえず完成です。

でも、あつという間の一年が終わってみると
結局出来ていらないなということが多いですね。
春には入学試験や就職試験がありますが、予
測困難で不確実な時代です。気候変動の影響と
みられる温暖化やそれに伴い災害や、農業や魚
業にも深刻な影響が出ています。
さらに今はAIなど破壊的な技術によつて社会
はがらりと変化しています。公教育では不登校
が35万人を超えて、校内暴力も増え続け、学力の
低下が顕著になっています。

皆さんはそんな大変な時代を生きていかなければ
なりません。格差社会が広がる中で

『君たちはどう生きるか?』は真剣に
考えなければならない重大なテーマです!

めで旅行されたティーンエイジャーの多くは、同日からアカウントが使えなくなつた。しかし、こうした規制をすり抜け、見つかるまでソーシャルメディアを閲覧したり投稿したりするつもりだと、BBCに話す若者もいる。新法では、メタやTikTok、ユーチューブといったソーシャルメディアを運営する企業は、オーストラリアの16歳未満がアカウントを保有しないように「合理的な措置」を講じなくてはならない。この禁止措置に、世界各国の指導者は大いに期待を寄せている。テクノロジー企業が不安を抱く中、有害なコンテンツやアルゴリズムから子どもを守るために必要な措置だと、正当化する声が出てい

る。一方で、全面的な禁止は現実的ではなく賢明な措置とは言えないとの批判もある。この画期的な政策は、アンソニー・アルバニー・ジーサ首相が特に力を注いできたプロジェクト。

皆さんにはこのオーストラリアの法律どう思
いますか？私個人としては賛成ですが日本で
は無理ですね。16歳未満の子どもたちがSN
Sを利用するメリットは全くないとは思いま

生きる力に わたしたちの授業 ■87■ 教育社会学者 本田由紀さん

全国の中学生に、さまざまな分野で活躍する人が語る「授業」の「社会」の先生は、教育社会学者で東大教授の本田由紀さん。「社会科は世の中の仕組みを知り、より良くするための教科。日本を持続させるには多様性や異質性を尊重する国にする必要がある」と話す。

小学生の時は変な行動で受けをねらういたずらっ子でした。集合写真で変顔をするような。好きな漫画は「がきデカ」。下品で変な格好の「少年警察官」が「死刑！」なんて言う作品です。良議をひっくり返すのが面白かった。

当時から反権力的だったかもしれない。

両親が教員で漫画をさらう母の日を盗んで夢中になりました。高松市の実家周辺は田んぼで娯楽がなく、本だけはたくさん買ってもらえたから児童文学も読みあさった。

中学校に進むと型にはめられる感じで、受験勉強の圧力を意譲しました。学校には反発が強く、授業中もノートや机に漫画を描いていました。

「何で授業を聞かないの」と若い女性の先生に言われ「成績はいいから放っておいて」と反論すると先生が泣いてしまった。扱いづらい子でしたが、「机に描くなよ」という感じで紙をずっと置いてくれた年配の男性の先生もいて、見守ってもらえていたのでしょう。

卓球部に入ったものの、クラスでは友達に違和感があり、徐々にぼつんと一人に。つらかったけど、理由が分からなかった。みっともなくても何とかやってきたのは、その時々で好きなものがあったからかもしれない。

高校入学後、模擬試験でたまたま香川県内1位になり、私はさらにおかしくなります。成績を下げられないと思い、夜中にガリ勉をして学校では寝ていました。一方で友達と話しても何を言うのが正解か、笑うのが正解か、と常に「正解」を意識し、感情がわからず、雑談もできなくなりました。

母が医者を勧めて理系コースを選んだけど、やはり文系へ、と思い、記憶機能が壊れるほど日本史や世界史の知識を詰め込みました。ロボットのように覚え、自分が何者か分からぬよう状態で東大に合格しました。

順調な経験に見えるでしょうが、自己肯定感は低いまま。でも、高校の美術部で文化祭のポスターを描くなど活躍したと同窓会で言われ、自己評価と違って意外でした。

大学卒業のころは女子の就職が厳しく、研究の道を選びました。教育を軸に日本を調べ、「教育、仕事、家族」の関係の変化を研究しています。

社会科は世の中の仕組みを知り、より良い世の中に変えるための教科です。地理も歴史も公民も、大人になると「知っておくべきだった」と思う大事なことが教科書に詰まっている。暗記科目だと思うでしょうが、世の中に出て経験すると分かります。例えば「民主主義」や「三権分立」は人類の歩みの中で必要だからつくられ、皆さんは社会の仕組みでできていると言つていいほどです。

私は小さい時から違和感を覚えてきました。やがて自分だけでなく、世の中がおかしいと考えるようになります。それが生きる力になりました。

今の日本は人口が減り、少子化なのに子どもの自殺もいじめや不登校も増えている。貧困率は高く、男女格差もすごく大きい。でも、他国の方から別の可能性を探れるというのが私の研究です。そんなことを考える基礎を学ぶのが社会科。社会科に限らず、学ぶこと、知ることは生きるための基本になります。

戦後の日本は学校を出て会社に勤め、家族を養うという循環がうまくいき、発展したように見えました。でも、実は長時間労働で無理を重ねただけで、それが崩れた今は厳しい。日本を持続させるには過去を美化せず、新しい手法で変える必要がある。私はそのための提案をしています。

いい大学から大企業に進めば勝ちという価値観ではなく、多様性や異質性を尊重し、意外性や自由を認め、変わった人でも大丈夫だと受け入れる国にする必要があります。

私の原動力は怒り。何かに怒りをぶつける間は自分を追い込みすぎないからでもありますが、今の日本がおかしいと思う理由を説明し、より良く書らせる国にしたい。

皆さんもやりたいことを続けてほしいし、いやなことはなぜいやなのかな考えてほしい。学校がつらいなら休んでいいから、外に出ていろいろ試そ

う。とにかく「つらくても死なないで」と言いたい。私もいまだに失った感情を回復する途中ですが、生きていれば回復の道があることに懸けませんか、と伝えたいです。



本田由紀 ほんだ・ゆき 1964年徳島市生まれ、高松市育ち。東大教育学部卒、東大で博士号を取得。日本労働研究機構（現在は労働政策研究・研修機構）を経て東大教育学研究科教授。同科の学校教育高度化・効果検証センター長。「【日本ってどんな国？】」「【東大卒】」の研究などの本を書いている。

北海道新聞 2025.12.4

釧高専生、国際学生サミット出場 SDGs解決策発表



釧路工業高等専門学校（大塚友彦校長）3年の藤村葉月さん、浅原よしえさん、大橋優仁さんの3人が、20日から中東のカタールで開かれる、持続可能な開発目標（SDGs）についての学生サミットに、新規開発のウェブアプリを引っ提げて出場、「住み続けられるまちづくり」のためのアイデアを世界に提案する。SDGsの17テーマのうち四つについて、世界の高校生が解決のためのプロジェクトを持ち寄り発表するイベントで、同校によると、日本からは初出場。

出場するのは同国の教育機関「カタールアカデミーアルワクラ」が主催し、昨年から首都ドーハで開かれている「Global Innovation in Sustainability Summit in Qatargas 2025」。SDGsの中の4テーマ「働きがいも経済成長も」「産業と技術革新の基盤をつくろう」「人や国の不平等をなくそう」「住み続けられるまちづくりを」のいずれかについて解決策を考え実行し、その結果を発表する。交通費と宿泊費は主催者が負担する。

15カ国22チームが参加し、釧路高専チームは日本から唯一の出場となる。挑戦のきっかけは昨年2月に浅原さんが、留学先のフィリピンのセブ島でイベントのことを知ったことにさかのぼる。「地域の課題を解決し、世界の課題に応用する」というイベントのコンセプトを踏まえ、取り組むテーマは、衰退が止まらない釧路の現状に照らして「住み続けられるまちづくり」を選択。書類審査を通過して出場権を獲得し、昨年7月から毎月、ビデオで進展を報告してきた。

釧路のまちの課題を探す中で3人は、中心市街地の裏通りにごみが散乱していることに着目し「ゴミ拾いを推進するアプリ」の開発に乗り出した。利用者はごみ拾いなど「良いこと」をしたことをアプリに投稿し、他の利用者がリアクションを返すのが基本機能で、投稿やリアクションをするたびにポイントを獲得できる。アプリを通じて駅周辺に清潔を取り戻すとともに、利用者が善行を積みたくなるような、モチベーションを生み出すことを目指した。アプリは「良い（good）」と「行き（dead）」を組み合わせ「Good deed」と名付けた。

プラウザで開けるウェブアプリ形式で、情報工学分野の大橋さんが主に開発を担当した。試作したアプリは昨年12月に釧路市内で開かれた高等教育機関4校による交流イベントで発表。イベント参加者から実証試験への協力を募り、今年1月から運用を始めている。現在は2月のサミットに向か、利用者アンケートなどで実績をレポートにまとめている。藤村さんと浅原さんは、レポート作りやアプリの仕様策定、現地での発表の準備などに当たっている。

釧路新聞 2025.02.12